
若年者の男女共同参画に関する意識についての
検討結果

平成24年6月

滋賀県男女共同参画審議会

目 次

1. はじめに	1
2. 問題意識	2
3. 若年者の男女共同参画に関する意識の現状	4
(1) ロールモデルについて	4
(2) 男女共同参画教育について	8
(3) テレビ、ゲーム等の影響について	11
(4) 将来の不安について	12
(5) 就労（仕事）について	14
(6) 結婚、子育てについて	17
(7) 男女共同参画意識について	20
(8) 大学生の意識について	24
4. 若年者の男女共同参画に関する意識の現状（まとめ）	26
5. 若年者の男女共同参画意識に影響を及ぼす要因について	28
6. 今後の方向性と対応方策	30
7. 若年者の男女共同参画の推進に向けて	32
8. 参考資料（若年者の男女共同参画に関する意識調査 調査概要）	33

1. はじめに

滋賀県では平成 23 年 3 月に「滋賀県男女共同参画計画～新パートナーしがプラン」を策定されました。滋賀県男女共同参画審議会（以下「審議会」という。）では、県から諮問を受け、滋賀県男女共同参画計画の改定にあたり、様々な視点から今後の男女共同参画社会の実現に向けた取組などを検討してきました。

議論の中で、学生や 20 歳代の若年者において、固定的性別役割分担意識が強まっているのではないかという指摘がありました。また、県が実施する意識調査においても、「男性は仕事をし、女性は家庭を守るべき」に同感する割合が 20 歳代女性において強まっている傾向があることがわかりました。

そこで、審議会では、20 歳代の若年者の男女共同参画意識はどのようなものか、また、若年者の男女共同参画意識に影響を及ぼしている要因は何かを探り、若年者に対する効果的な施策が展開できるよう、施策の方向性を検討することとなりました。

審議会では、滋賀県が実施した「若年者の男女共同参画に関する意識調査（平成 23 年度）」や大学生へのヒアリング調査等の結果を踏まえ、審議会でも検討を重ね、このたび、検討結果として取りまとめたものです。

2. 問題意識

(滋賀県における 20 歳代女性の意識)

- ・滋賀県における意識調査において「男性は仕事をし、女性は家庭を守るべき」に同感する女性の割合を年代別に見てみると、20 歳代女性の同感する割合は 30 歳代、40 歳代を上回り、50 歳代とほぼ同じ割合となっており、若い世代における固定的性別役割分担意識が高くなっている傾向がみてとれます。(図 1)
- ・一方、男性についてみると、概ね年齢が高くなるほど同感する割合が高くなる傾向にあり、女性のような傾向は見られません。(図 2)
- ・20 歳代女性について、近年、同感する割合が高くなる傾向があります。(図 3)

図 1 「男性は仕事をし、女性は家庭を守るべき」に同感する割合(女性)
[H21 男女共同参画社会づくりに向けた県民意識調査(滋賀県)]

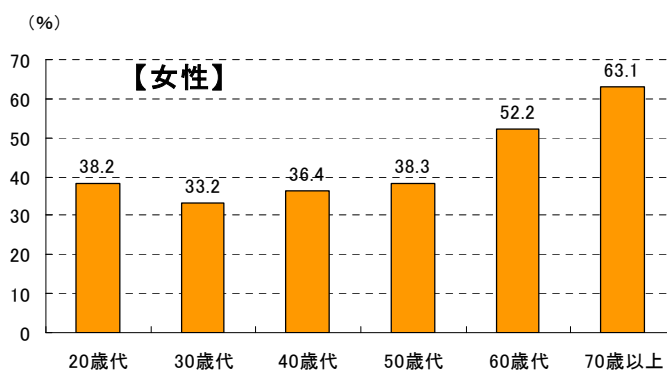


図 2 「男性は仕事をし、女性は家庭を守るべき」に同感する割合(男性)
[H21 男女共同参画社会づくりに向けた県民意識調査(滋賀県)]

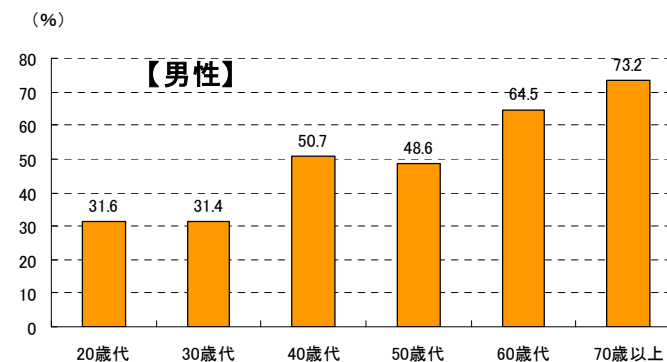
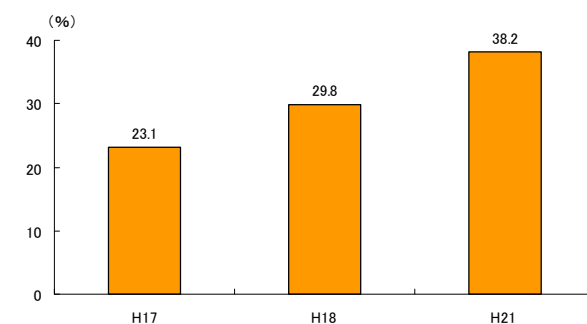


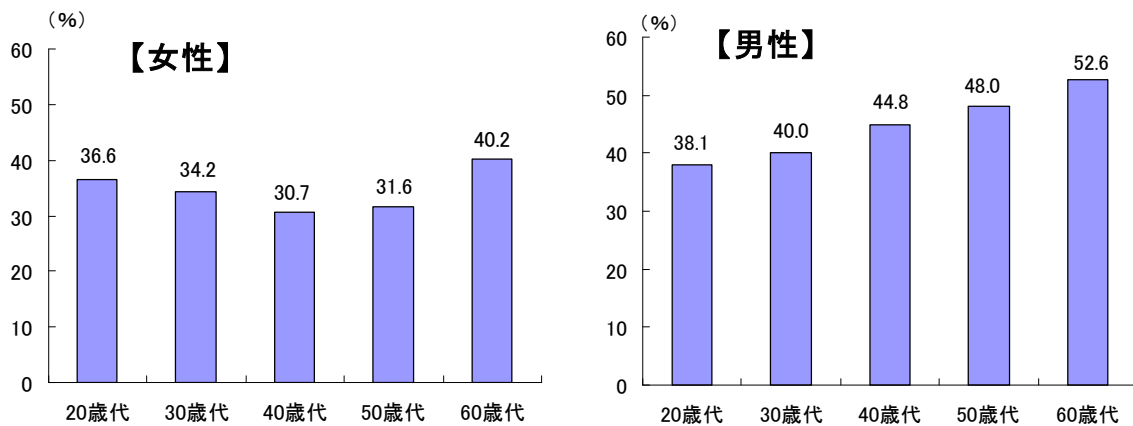
図 3 「男性は仕事をし、女性は家庭を守るべき」に同感する 20 歳代女性割合の推移[滋賀県調査]



(全国的な傾向)

- ・内閣府の「平成 21 年度男女共同参画白書」では、「男女のライフスタイルに関する意識調査」において、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」に賛成する割合をみると、女性では 20 歳代などの若い世代において、40 歳代や 50 歳代と比べて賛成する割合が多くなるなど、男性とは異なる傾向が見られることが指摘されています。(図 4)

図 4 「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」に賛成する割合
[内閣府調査:男女のライフスタイルに関する意識調査(H21)より作成]



(問題意識)

- ・このように、若年層の女性において、固定的性別役割分担意識が高くなっている傾向があります。この傾向については、審議会におけるこれまでの議論の中でも指摘されてきたものですが、その要因について一定の結論を得るには至っていませんでした。
- ・そこで、審議会では、若年者の男女共同参画意識の現状はどうなっているのか、また、20 歳代の固定的性別役割分担意識の要因は何か、必要な取組は何か、などについて検討を行いました。

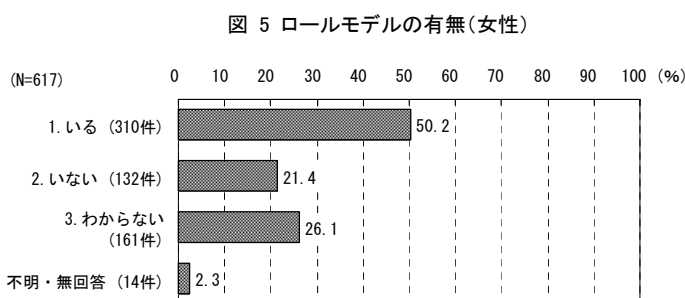
3. 若年者の男女共同参画に関する意識の現状

審議会の検討とあわせ、滋賀県において 20 歳代男女を対象とした「若年者の男女共同参画に関する意識調査」（以下「若年者調査」という。）が実施されました。また、県内大学において、学生へのヒアリング調査等もあわせて実施されました。そこで、若年者調査等の結果をもとに、20 歳代の意識とその要因を探ることとします。

(1) ロールモデルについて

(20 歳代女性のロールモデルは「母親」が約 6 割)

- ・「仕事と家庭を両立し、社会で活躍するためのお手本となるような人物」、いわゆる「ロールモデル」がいる女性は、50.2%となっています。（図 5）



- ・ロールモデルとしては、「母親」が 64.2%と最も多く、次いで「学校・職場の先輩、上司」が 46.8%、「友人・同僚」が 28.7%と続いています。（図 6）
- ・また、年齢別にみると、20～22 歳では、「母親」「父親」の割合が他の年齢層より高く、一方、「友人・同僚」「学校・職場の先輩、上司」は、26～29 歳が高くなっています。（図 7）

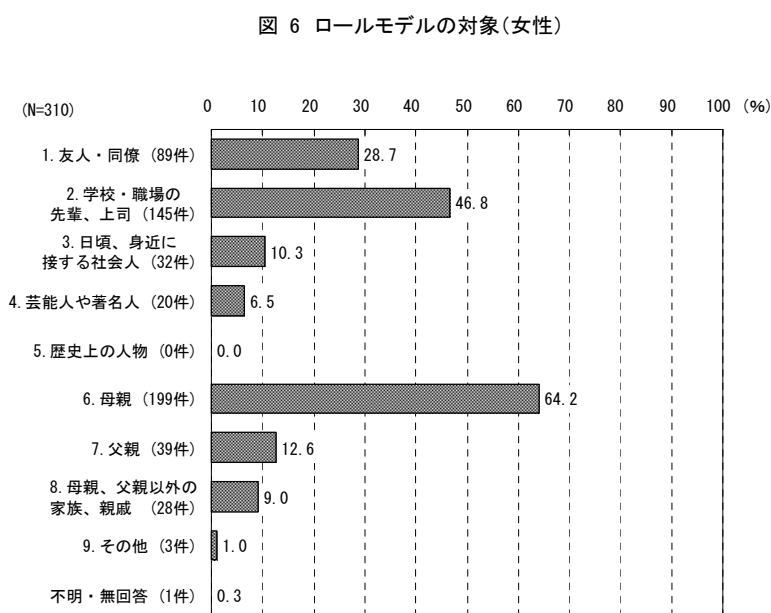
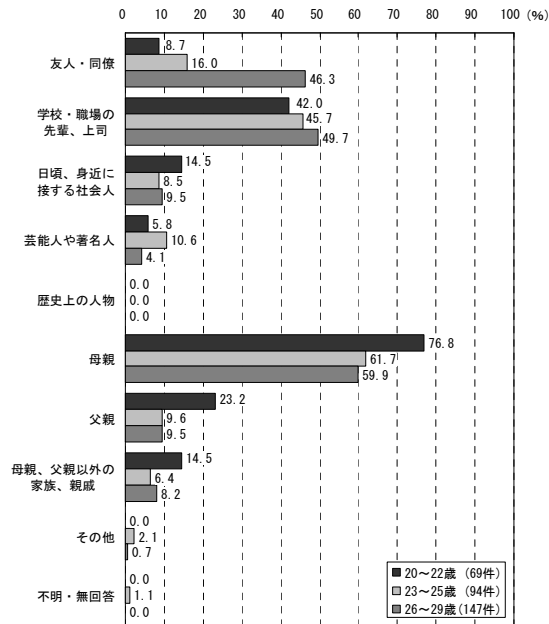


図 7 ロールモデルの対象(女性・年齢別)



(ロールモデルがいる女性の方が、固定的性別役割分担意識が低い)

- ・ロールモデルがいる女性といない女性を比較したところ、ロールモデルがいる女性の方が、いない女性よりも、「結婚、子どもの有無にかかわらず、仕事を続ける」割合が高くなっています。一方、「子どもができるまで仕事をもち、子どもができたなら家事や育児に専念する」女性の割合は、ロールモデルがいない女性の方が高くなっています。(図 8)
- ・「夫と妻が共同で家計を支え、共同で家事・育児などを分担する」割合は、ロールモデルがいる女性の方が高くなっています。逆に、「夫が家計を支え、妻が家事・育児などに専念する」割合は、ロールモデルがいない女性の方が高くなっています。(図 9)
- ・「男は仕事をし、女は家庭を守るべき」という考え方に同感する割合は、ロールモデルがいる女性の方が、いない女性に比べ低くなっています。(図 10)
- ・「保育園などに子どもを預けず、母親が面倒をみるべきだ」という考え方に同感する割合は、ロールモデルがいる女性の方が、いない女性に比べ低くなっています。(図 11)
- ・「父親は、母親と役割分担して、家庭・育児に積極的に参画すべきだ」という考え方に同感する割合は、ロールモデルがいる女性の方が、いない女性に比べ高くなっています。(図 12)

図 8 ロールモデルの有無×自身の働き方の現実(女性)

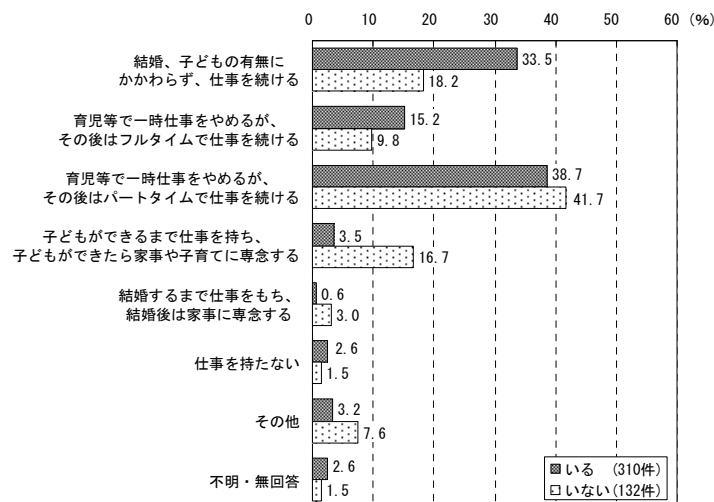


図 9 ロールモデルの有無×男女の役割分担(女性)

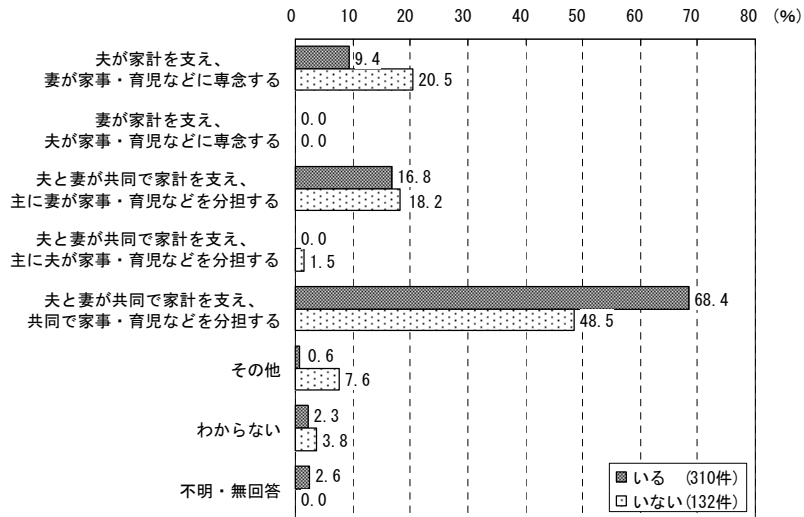


図 10 ロールモデルの有無×「男は仕事をし、女は家庭を守るべき(女性)

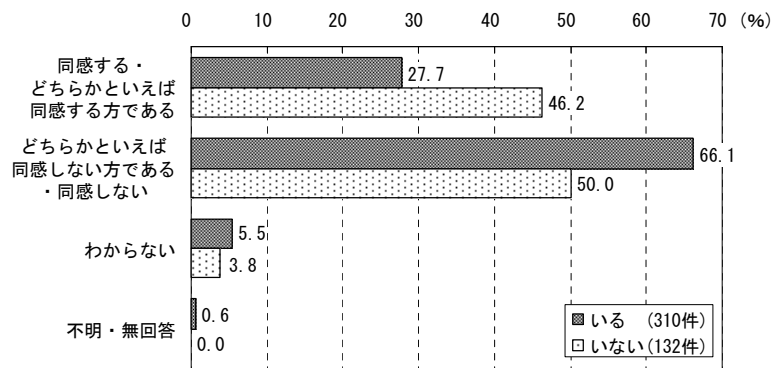


図 11 ロールモデルの有無×「子どもが小さい時は、保育園などに子どもを預けず、母親が面倒をみるべき(女性)

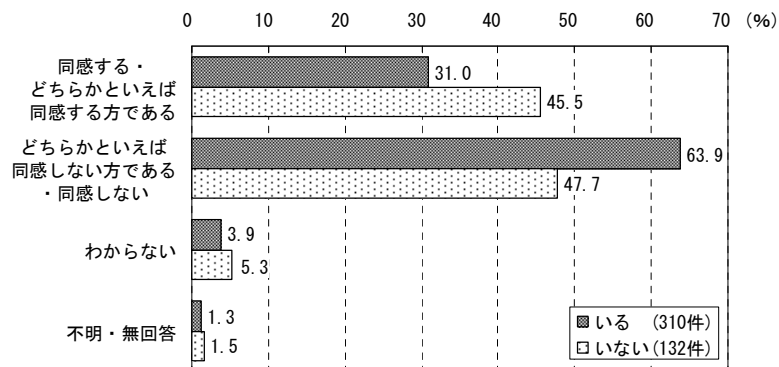
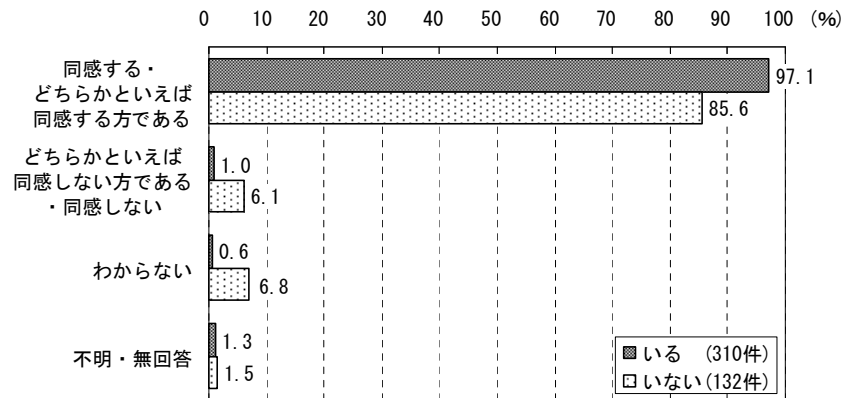


図 12 ロールモデルの有無×「父親は、母親と役割分担して、家事・育児に積極的に参画すべき」(女性)



ロールモデルについて

- 20 歳代の女性にとってのロールモデルは「母親」が最も多くなっています。
- 20 歳代前半では、ロールモデルとして「母親」や「父親」の割合が高く、身近な家族の影響を受けていることがわかります。一方、20 歳代後半になると、「友人・同僚」や「学校・職場の先輩、上司」をロールモデルとする割合が高くなっており、年齢層でロールモデルに変化が見られます。
- ロールモデルがいる女性の方が、ロールモデルがいない女性に比べ、継続就労を選択し、固定的性別役割分担が低いなど、男女共同参画意識における差がみてとれます。

(2) 男女共同参画教育について

(約6割が男女共同参画を学習、約8割が理解)

- ・小・中・高等学校で男女共同参画を学んだことがある人は、65.7%となっています。(図13)
- ・また、小・中・高等学校で学んだ男女共同参画の内容について、「理解できた」人が21.3%、「ある程度理解できた」人が62.8%となっており、あわせて84.1%となっています。(図14)

図13 男女共同参画の学習経験

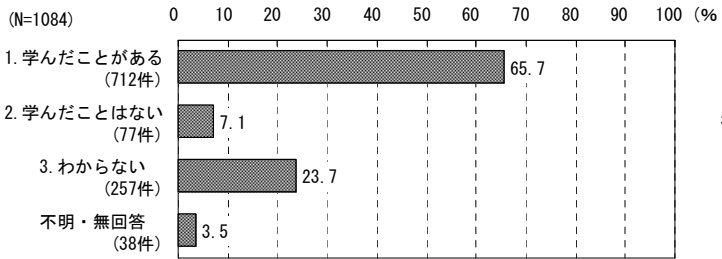
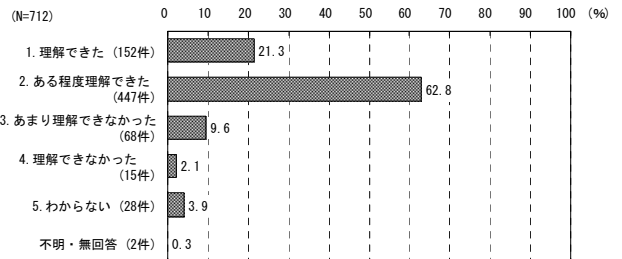


図14 男女共同参画学習の理解度



(学習経験がある人の方が、女性自身や配偶者の就労を希望する割合が高い)

- ・男女共同参画を学んだことがある女性は、ない女性に比べ、自分自身の働き方の現実として、「結婚、子どもの有無にかかわらず、仕事を続ける」割合が高くなっています。(図15)
- ・男女共同参画を学んだことがある男性は、ない男性に比べ、配偶者の働き方の現実として、「結婚、子どもの有無にかかわらず、仕事を続ける」「育児等で一時仕事をやめるが、その後はフルタイムで仕事を続ける」「育児等で一時仕事をやめるが、その後はパートタイムで仕事を続ける」の割合が高く、「子どもができたなら家事や子育てに専念する」「結婚後は家事に専念する」の割合は低くなっています。(図16)

図15 学習経験×自身の働き方の現実(女性)

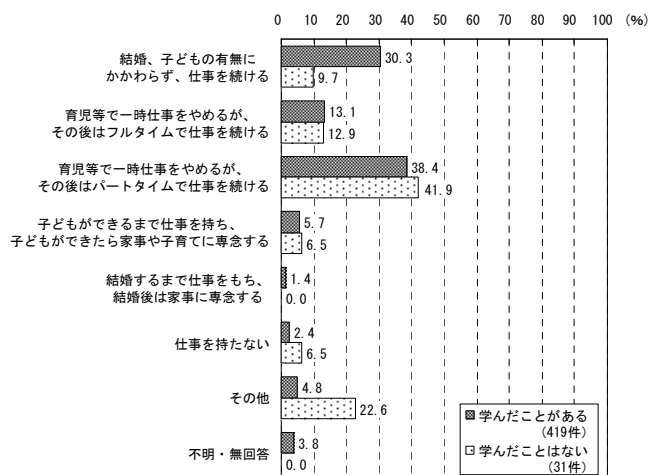
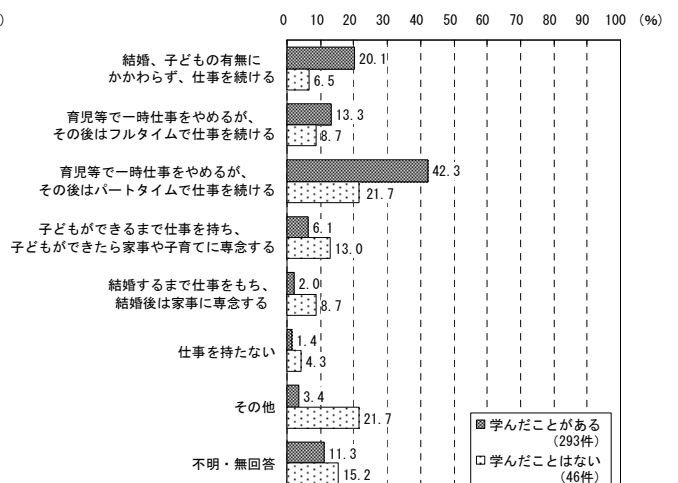


図16 学習経験×配偶者の働き方の現実(男性)



(男女共同参画の学習経験があり、理解度が高い方が男女の固定的性別役割分担に肯定的)

- ・「男は仕事をし、女は家庭を守るべき」「子どもが小さい時は、保育園などに子どもを預けず、母親が面倒をみるべきだ」に同感する割合は、男女共同参画の学習経験があり、理解度が高い方が高くなっています。(図 17, 18, 19, 20)

図 17 学習経験×「男は仕事をし、女は家庭を守るべき」

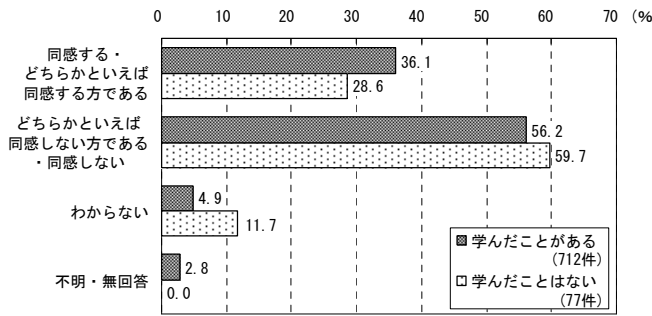


図 18 理解度×「男は仕事をし、女は家庭を守るべき」

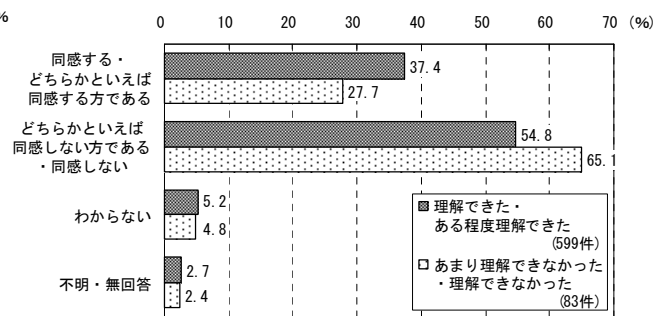


図 19 学習経験×「子どもが小さい時は、保育園などに子どもを預けず、母親が面倒をみるべき」

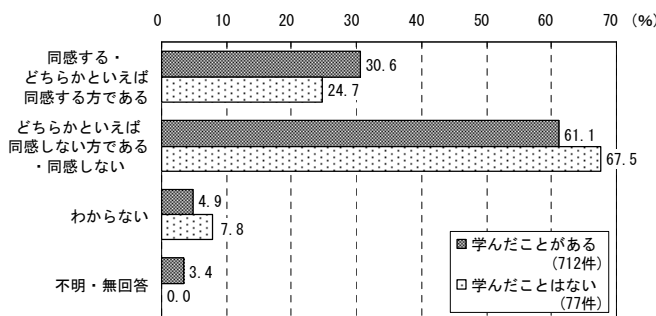
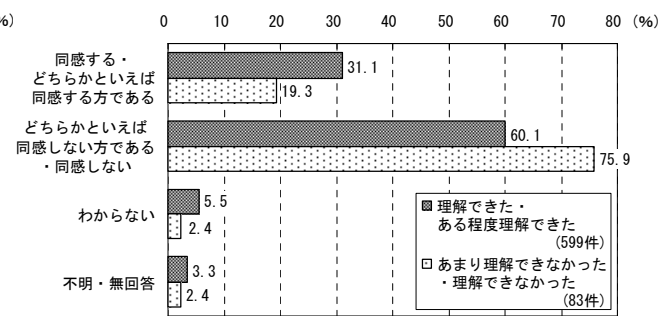


図 20 理解度×「子どもが小さい時は、保育園などに子どもを預けず、母親が面倒をみるべき」



(男女共同参画の学習経験があり、理解度が高い方が父親の家事・育児参画に肯定的)

- ・「父親は、母親と役割分担して、家事・育児に積極的に参画すべきだ」に同感する割合は、男女共同参画の学習経験があり、理解度が高い方が高くなっています。(図 21, 22)

図 21 学習経験×「父親は、母親と役割分担して、家事・育児に積極的に参画すべき」

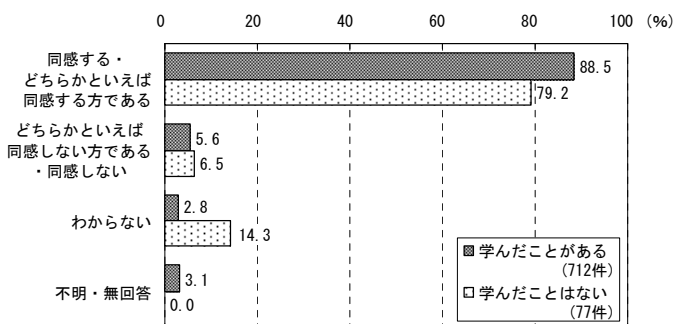
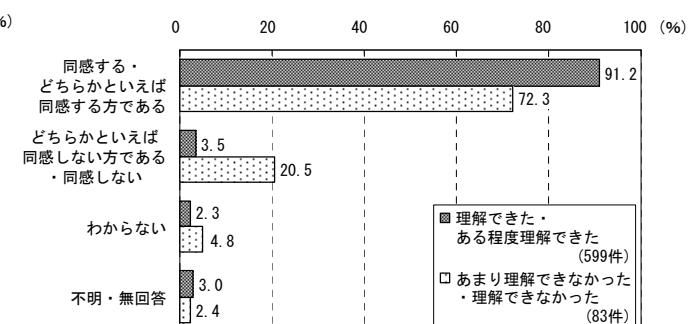


図 22 理解度×「父親は、母親と役割分担して、家事・育児に積極的に参画すべき」



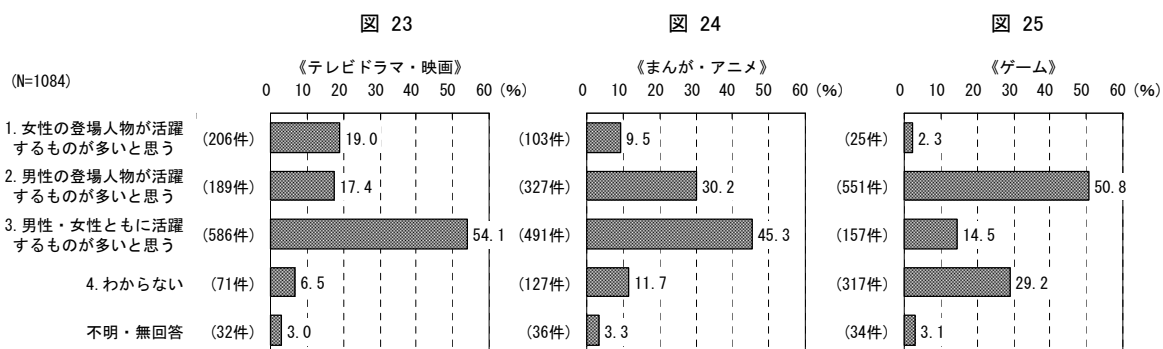
男女共同参画教育について

- 20 歳代の約 6 割が男女共同参画の学習経験があり、そのうち理解できた人が約 8 割となっています。
- 男女共同参画の学習が、女性が継続就労を選択することにつながっていると考えられます。
- 男性についても、男女共同参画の学習が、配偶者の就労を選択することにつながっていると考えられます。
- 一方、「男は仕事をし、女は家庭を守るべき」「子どもが小さい時は、保育園などに子どもを預けず、母親が面倒をみるべきだ」という固定的性別役割分担に関する内容については、男女共同参画の学習経験があり、理解度が高い層の方が、同感する割合が高くなっています。男女共同参画を学ぶことで、現実の厳しさを認識し、現実を直視すればするほど、仕事と家庭の両立に向けた社会の未熟さや制度の未整備がわかり、両立は困難と考えたり、あえて厳しい道を選ばないという選択をしている若年者の傾向が現れているのではないかと考えられます。
- 男女共同参画の学習経験があり、理解度が高い層の方が父親の家事・育児参画に肯定的となっています。

(3) テレビ、ゲーム等の影響について

(「ゲーム」で男性中心の傾向あり)

- ・「テレビドラマ・映画」「まんが・アニメ」については、「男性・女性ともに活躍するものが多いと思う」割合が最も高くなっていますが、「ゲーム」については、「男性の登場人物が活躍するものが多いと思う」割合が50%を超えており、「ゲーム」では、男女の役割分担について、男性中心の傾向があると認識されていることがわかります。(図23, 24, 25)



テレビ、ゲーム等の影響について

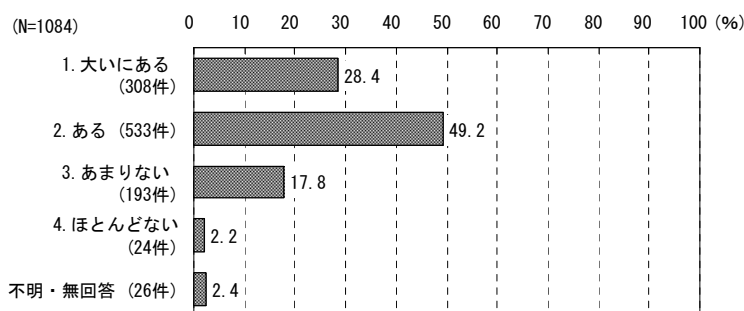
- 「テレビドラマ・映画」「まんが・アニメ」については、登場人物の認識に男女の違いはみられませんが、「ゲーム」については、若年者の半数が「男性の登場人物が活躍するものが多い」と認識しており、「ゲーム」の登場人物については男性中心の傾向があるのではないかと考えられます。

(4) 将来の不安について

(約8割が「将来に不安」)

- ・将来への不安について、「ある」が49.2%と最も多く、次いで、「大いにある」が28.4%となっており、20歳代男女の77.6%が将来に何らかの不安を抱えていることがわかります。(図26)

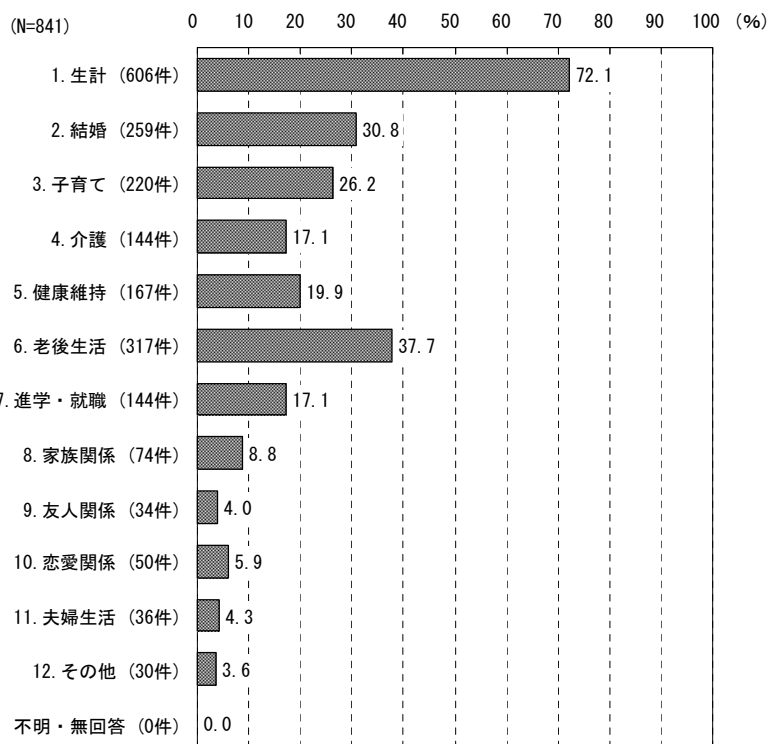
図 26 将来の生活についての不安



(将来の不安の内容は、「生計」「老後」「結婚」)

- ・将来の不安の内容としては、「生計」が72.1%と最も高くなっています。次いで、「老後生活」が37.7%、「結婚」が30.8%となっています。(図27)

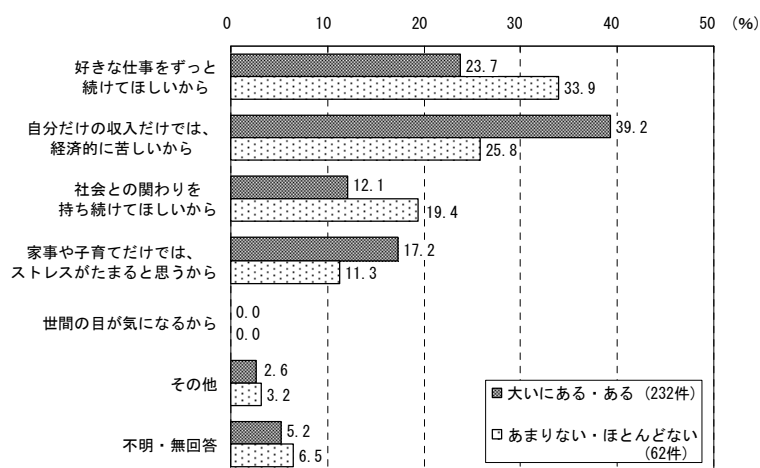
図 27 将来の生活についての不安の内容



(将来の不安がある男性の方が、経済的理由から配偶者の就労を希望する割合が高い)

- ・将来の不安がある男性の方が、ない男性に比べて、配偶者に仕事を継続してほしい理由として、「自分だけの収入だけでは、経済的に苦しいから」の割合が高くなっています。一方、不安がない男性は、「好きな仕事をずっと続けてほしいから」、「社会との関わりを持ち続けてほしいから」の割合が高くなっています。(図 28)

図 28 将来の生活の不安の有無×配偶者に仕事を継続してほしい理由(男性)



将来の不安について

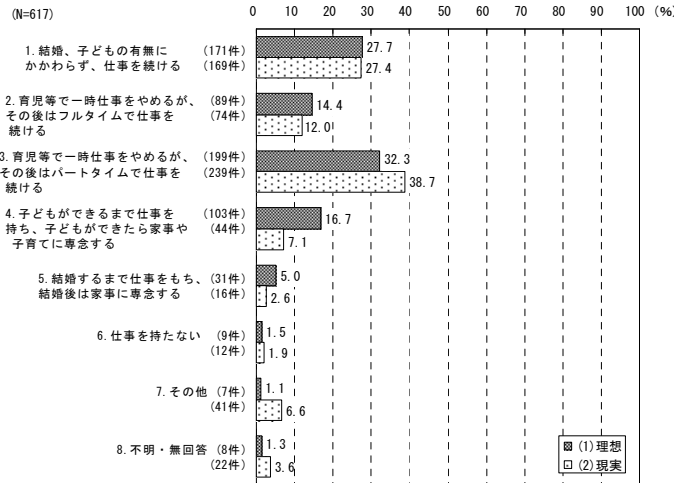
- 20 歳代の約 8 割が将来の生活に不安を抱えています。
- 不安の内容としては、「生計」が最も多くなっており、厳しい経済状況や就職難などを反映していると考えられます。
- また、「老後生活」が不安の内容の 2 番目となっており、年金や社会保障などの不安が反映されていると考えられます。
- 20 歳代の多くが「生計」について不安を抱えていることから、「自分だけの収入だけでは経済的に苦しいから」配偶者に仕事を継続してほしいと考える男性が多いと考えられます。
- 一方、将来の不安が少なければ、配偶者に仕事を継続してほしい理由として「好きな仕事をずっと続けてほしいから」「社会との関わりを持ち続けてほしいから」など経済的な理由以外の項目を挙げる割合が高くなっており、将来への不安の有無が、配偶者に対して就労を希望する理由に影響を及ぼしていると考えられます。

(5) 就労（仕事）について

(女性は、働き方の理想、現実ともに「パートタイム」が多い)

- ・女性の働き方の「理想と現実」をみると、理想、現実ともに「育児等で一時仕事をやめるが、その後はパートタイムで仕事を続ける」が最も高くなっています。(図 29)
- ・また、理想と現実の差を見てみると、「育児等で一時仕事をやめるが、その後はパートタイムで仕事を続ける」割合は理想よりも現実の方が高くなっており、その他の働き方については、理想よりも現実の方が低くなっています。(図 29)

図 29 働き方の理想と現実(女性)



(家事専業の女性の6割が就労希望、希望の就労形態は7割がパート)

- ・若年者調査では、女性の家事専業の割合は12.0%となっており、そのうち、62.2%が今後就労したいと思っています。(図 30)
- ・家事専業の女性が就労を希望する形態は、パート等が73.9%と多く、正規での就労希望は21.7%となっています。(図 31)

図 30 今後の就労希望

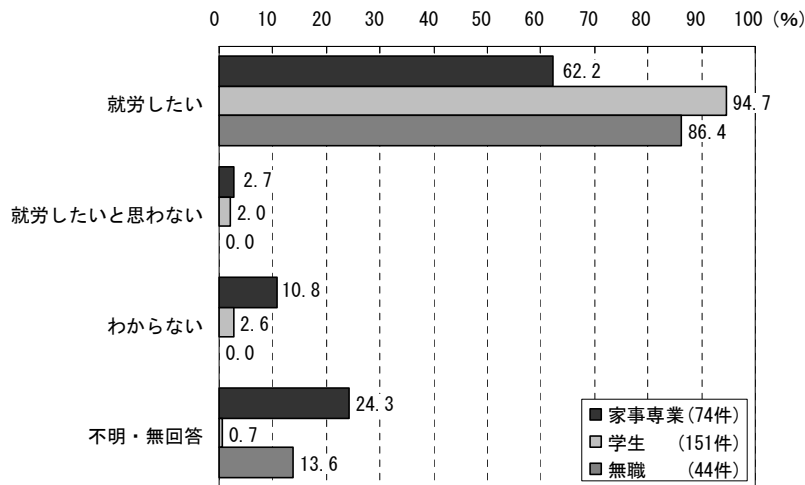
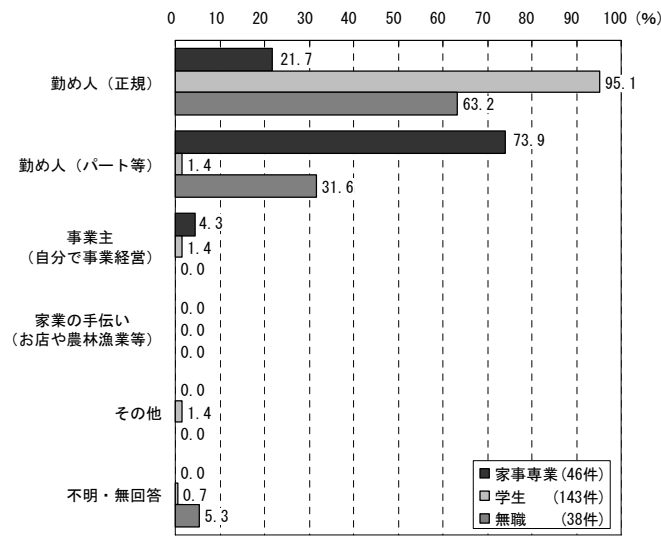


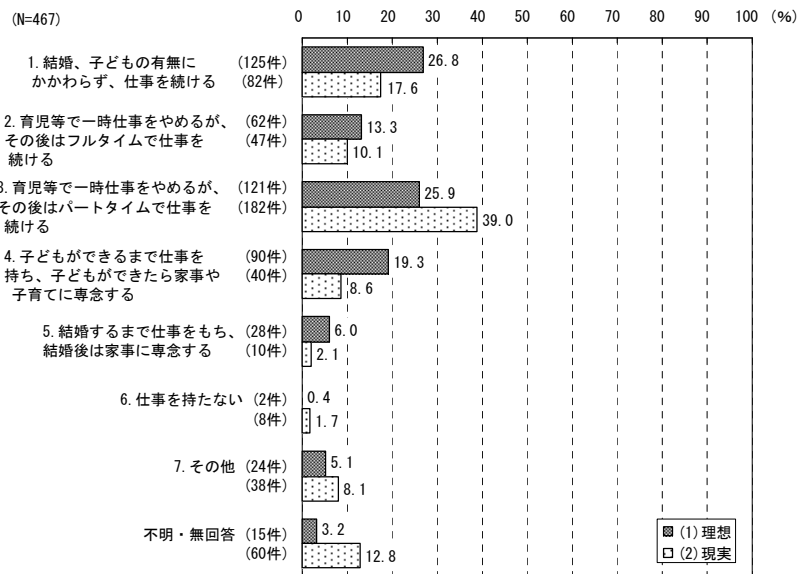
図 31 今後の就労希望形態



(男性は、配偶者の働き方の現実として「パートタイム」を希望する割合が高い)

- ・男性に対して「配偶者の働き方の理想と現実」を聞いたところ、理想では、「結婚、子どもの有無にかかわらず、仕事を続ける」が 26.8%、「育児等で一時仕事をやめるが、その後はパートタイムで仕事を続ける」が 25.9%と高くなっており、現実では、「育児等で一時仕事をやめるが、その後はパートタイムで仕事を続ける」が 39.0%と最も高くなっています。(図 32)
- ・また、理想と現実の差をみると、女性の働き方の理想と現実と同様に、「育児等で一時仕事をやめるが、その後はパートタイムで仕事を続ける」割合は理想よりも現実の方が高くなっており、その他の働き方については、理想よりも現実の方が低くなっています。(図 32)

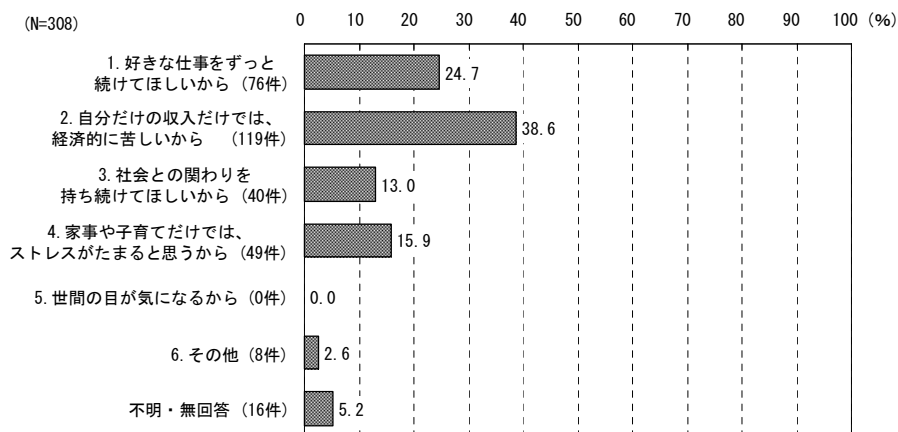
図 32 配偶者の働き方の理想と現実(男性)



(配偶者に仕事を続けてほしい理由は、「経済的に苦しいから」がトップ)

- ・男性が配偶者に仕事を続けてほしい理由としては、「自分だけの収入だけでは、経済的に苦しいから」が 38.6%と最も高く、次いで、「好きな仕事をずっと続けてほしいから」が 24.7%となっています。(図 33)

図 33 配偶者に仕事を続けてほしい理由(男性)



就労（仕事）について

- 女性は、働き方の理想、現実とも、仕事を一旦やめる、または家事等に専念する割合が6割を超えています。また、一旦仕事をやめた後の働き方として、理想、現実ともにフルタイムよりもパートタイムを選ぶ割合が高くなっています。
- 男性についても、配偶者の働き方の理想、現実とも、仕事を一旦やめる、または家事等に専念する割合が6割程度となっている。また、配偶者が一旦仕事をやめた後の働き方として、理想、現実ともにフルタイムよりもパートタイムを選ぶ割合が高くなっています。
- 将来の生活の不安の多くが「生計」であり、男性は、自分だけの収入では経済的に苦しく、生計を補完するために、配偶者の就労を希望していることがわかります。

(6) 結婚、子育てについて

(男女とも多くが「結婚をし、子どももほしい」を希望)

- ・「結婚」「子ども」について、女性の87.8%、男性の76.9%が「結婚をし、子どももほしい」としています。(図34)
- ・希望する結婚年齢については、男女とも「26歳から29歳まで」が最も高くなっていますが、女性では、「25歳まで」が2番目に高く、男性では「30歳から34歳まで」が2番目に高くなっています。(図35)

図34 結婚・子どもについて

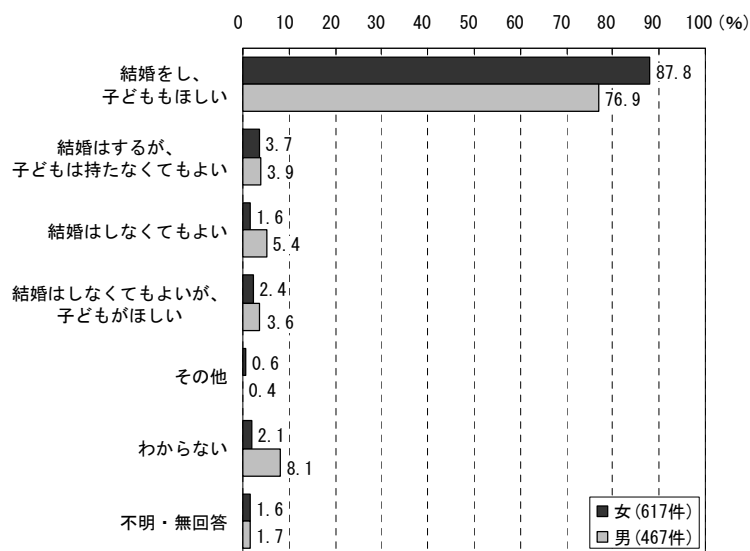
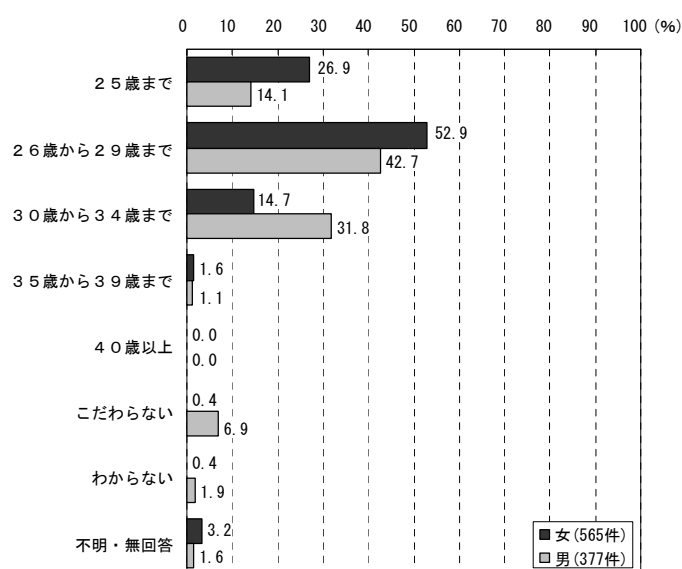


図35 希望する結婚年齢



(子どもの数は、理想より現実の方が少ない)

- ・理想の子どもの数は、「2人」が50.2%と最も高く、「3人」が31.6%とこれに次いでいます。一方、現実の子どもの数については、「2人」が58.1%と最も高く、「1人」が13.8%とこれに次いでいます。(図36)
- ・理想の子どもの数と現実の子どもの数を比較すると、理想の子どもの数を「1人」とする回答者の75.0%が現実の子どもの数と一致し、理想の子どもの数を「2人」とする回答者の66.2%が現実の子どもの数と一致しています。他方、理想の子どもの数を「3人」「4人」としながらも、現実には「2人」を選択する回答者が多くなっており、理想より現実の方が子どもの数が少なくなる傾向にあります。(図37)

図 36 子どもの数の理想と現実

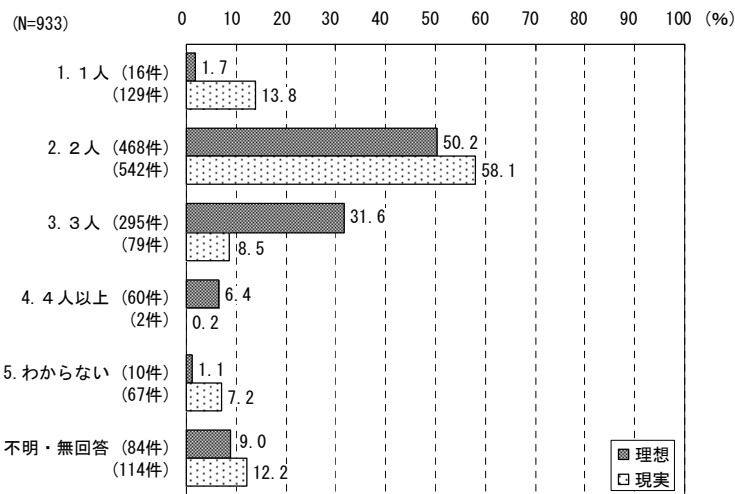


図 37 子ども希望人数(理想)×子どもの希望人数(現実)

		問16 付問3 子どもの希望人数<現実>						
		1人	2人	3人	4人以上	わからない	不明・無回答	合計
問16 付問2 子ども希望人数へ理想	1人	12	0	0	0	2	2	16
		75.0	0.0	0.0	0.0	12.5	12.5	100.0
	2人	93	310	4	0	43	18	468
		19.9	66.2	0.9	0.0	9.2	3.8	100.0
	3人	17	201	53	0	16	8	295
		5.8	68.1	18.0	0.0	5.4	2.7	100.0
	4人以上	7	27	22	2	2	0	60
		11.7	45.0	36.7	3.3	3.3	0.0	100.0
わからない	0	4	0	0	4	2	10	
	0.0	40.0	0.0	0.0	40.0	20.0	100.0	
不明・無回答	0	0	0	0	0	84	84	
	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	100.0	
合計	129	542	79	2	67	114	933	
	13.8	58.1	8.5	0.2	7.2	12.2	100.0	

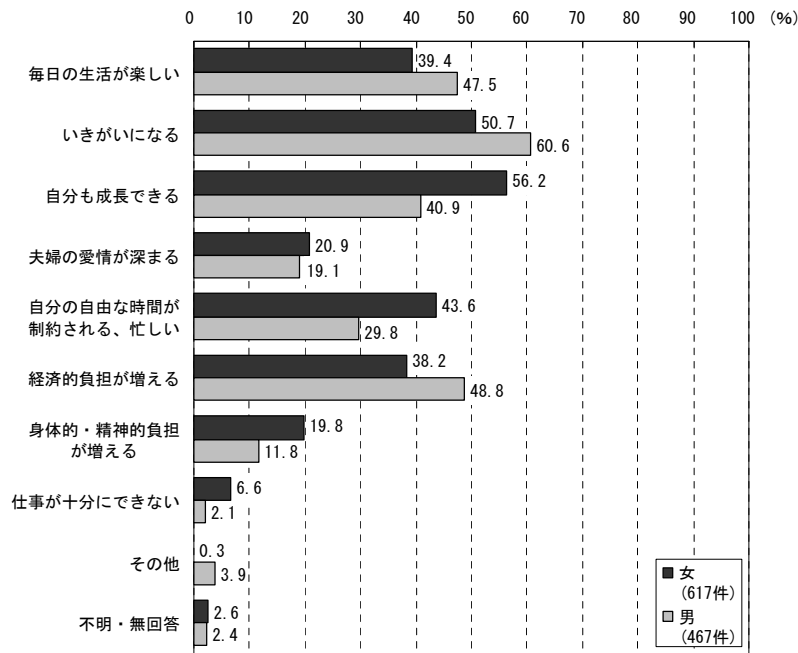
(男女で「子育てのイメージ」に差)

・女性では、子育てのイメージとして、「自分も成長できる」が最も多く、次いで「いきがいになる」が多くなっています。男性では、「いきがいになる」が最も多く、次いで「経済的負担が増える」が多くなるなど、女性と男性で、子育てのイメージに差があることがわかります。

(図 38)

・男性は女性に比べ、「経済的負担」への意識が高く、一方「自分の自由な時間の制約」については意識が低く、子育てへの関わり方がイメージに影響していると考えられます。

図 38 子育てのイメージ



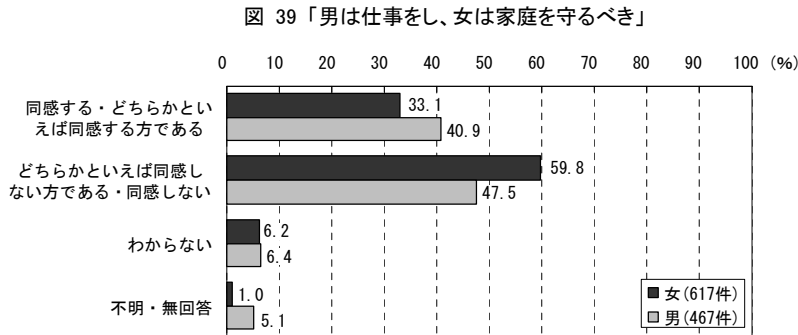
結婚、子育てについて

- 20歳代の男女とも、結婚や子どもを持つことに対する希望は高くなっています。
- 子どもの数は、理想より現実の方が少なくなる傾向があり、その理由としては、子育てのイメージから推察すると、経済的負担や時間的制約の影響が考えられます。
- 子育てのイメージでは、男性は女性に比べ、経済的負担感が高い一方、時間的制約や身体的・精神的負担の部分ではイメージが低くなっており、子育てへの関わり方の役割分担意識がイメージの差となっていると考えられます。

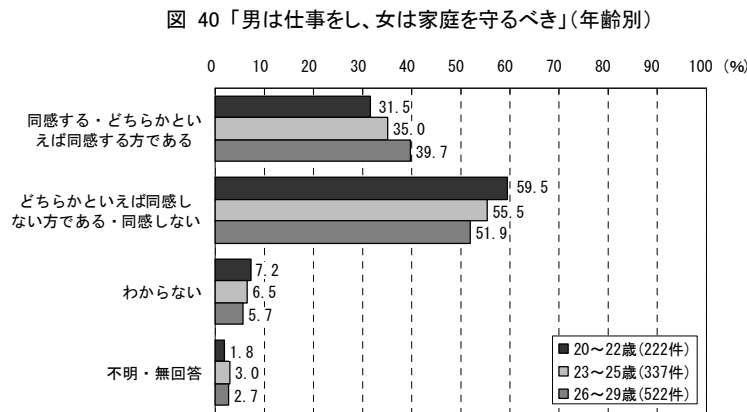
(7) 男女共同参画意識について

(女性の約3割、男性の約4割が「男は仕事をし、女は家庭を守るべき」に同感)

- ・「男は仕事をし、女は家庭を守るべき」に同感する男性は40.9%、同感する女性は33.1%となっています。(図39)



- ・年齢別にみると、20歳代後半では、同感する割合が高くなっています。(図40)



- ・同感する理由としては、「子どもの成長にとって良いと思うから」が28.6%と最も高く、次に「役割分担した方が効率が良いと思うから」が23.5%と続いています。(図41)
- ・年齢別にみると、20~22歳は、「自分の家庭がそうだったから」が最も高く、23~25歳、26~29歳では、「子どもの成長にとって良いと思うから」が最も高くなっています。(図42)

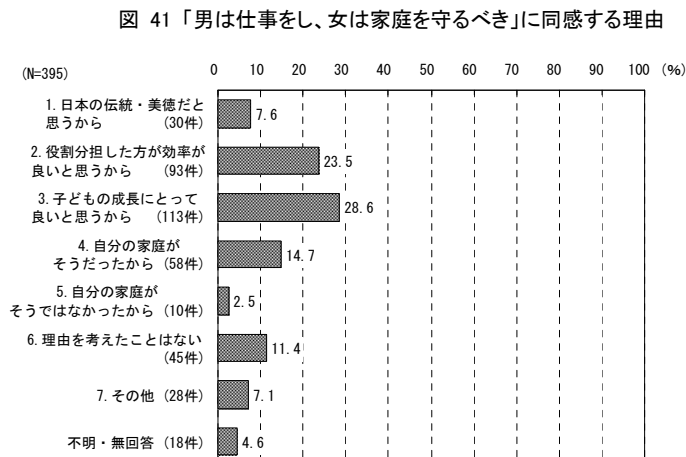
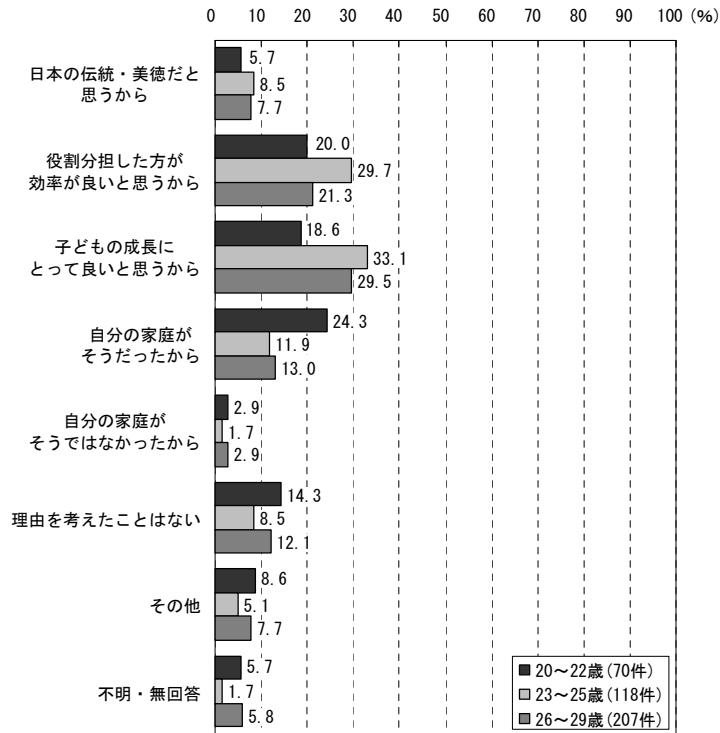


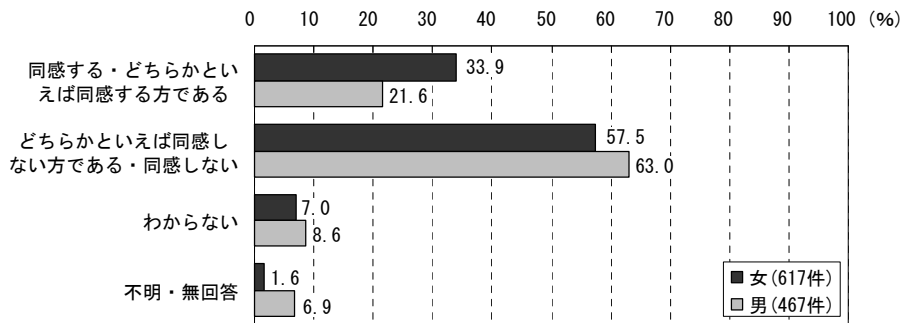
図 42 「男は仕事をし、女は家庭を守るべき」に同感する理由(年齢別)



(「子どもが小さい時は、保育園などに子どもを預けず、母親が面倒をみるべき」に女性の約3割が同感)

- ・「子どもが小さい時は、保育園などに子どもを預けず、母親が面倒をみるべきだ」という考え方に同感する男性は21.6%、同感する女性は33.9%となっています。(図 43)

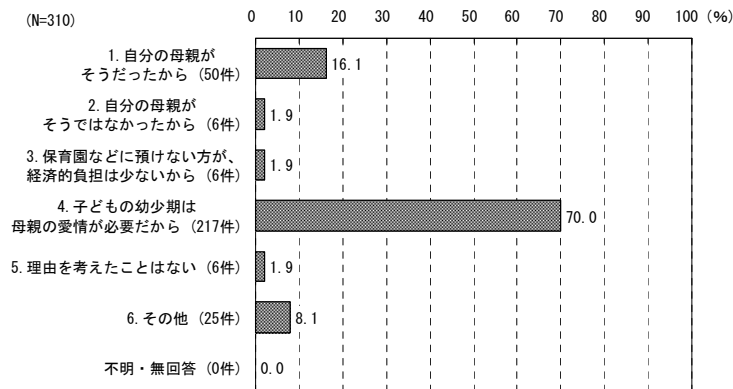
図 43 「子どもが小さい時は、保育園などに子どもを預けず、母親が面倒をみるべきだ」



・同感する理由としては、「子どもの幼少期は母親の愛情が必要だから」が70.0%となっています。

(図 44)

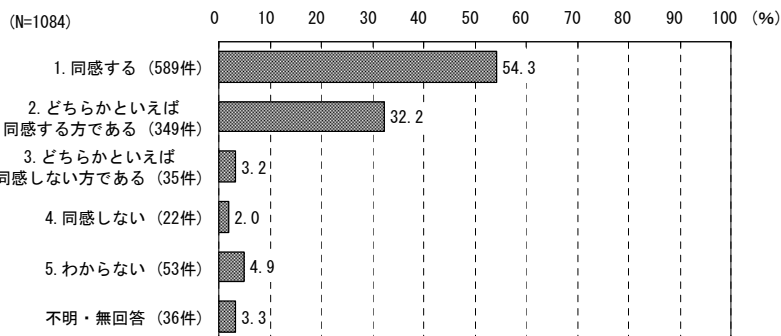
図 44 「子どもが小さい時は、保育園などに子どもを預けず、母親が面倒をみるべきだ」に同感する理由



(父親の家事・育児参画に約9割が「同感」)

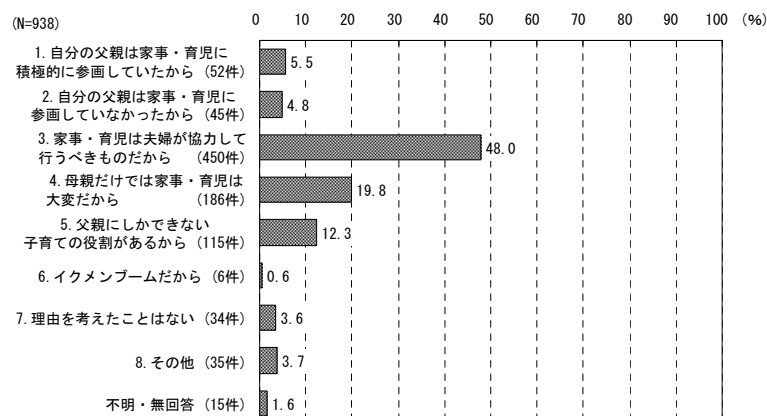
・「父親は、母親と役割分担して、家事・育児に積極的に参画すべきだ」という考え方に「同感する」「どちらかといえば同感する方である」を合わせると、86.5%となっています。(図 45)

図 45 「父親は、母親と役割分担して、家事・育児に積極的に参画すべきだ」



・同感する理由としては、「家事・育児は夫婦が協力して行うべきものだから」が48%と最も多く、次いで「母親だけでは家事・育児は大変だから」が19.8%となっています。(図 46)

図 46 「父親は、母親と役割分担して、家事・育児に積極的に参画すべきだ」に同感する理由



男女共同参画意識について

- 女性の約3割、男性の約4割が「男は仕事をし、女は家庭を守るべき」に同感しています。
- 20歳代の中では年齢が高い方が「男は仕事をし、女は家庭を守るべき」に同感する割合が高くなっており、社会での経験が固定的性別役割分担意識に影響していると考えられます。
- 「子どもが小さい時は、保育園などに子どもを預けず、母親が面倒をみるべきだ」については、女性の約3割、男性の約2割が同感しています。
- 「父親は、母親と役割分担して、家事・育児に積極的に参画すべきだ」に同感する割合は約9割となっています。同感する理由としては、「家事・育児は夫婦が協力して行うべきものだから」が最も多くなっています。

(8) 大学生の意識について

若年者調査では、20歳から29歳を対象としましたが、同じ20歳代でも、大学生と社会人とで意識の違いがあることが想定されたため、若年者調査とは別に大学生ヒアリングを実施し、検討結果の取りまとめの参考としました。

【大学生ヒアリングの結果概要】

(配偶者の働き方)

- ・配偶者の意向を尊重するという意見が多かったが、一方で自分自身の収入の状況にもよる、という意見もあった。(男性)

(ロールモデル)

- ・ロールモデルについては、ほとんどの学生が「いない」と答えており、ロールモデルがいる場合は、ほとんどが「母親」や「祖母」などの家族をロールモデルと考えていた。

(ドラマやゲーム等の影響)

- ・ゲームについては、男性の主人公が多く、男性のキャラクターの方が力が強いなど、男女で違いがあるという意見が多かった。ドラマやまんがは、男女で違いはないという意見が多かった。

(将来への不安)

- ・経済状況が厳しい中、今後の生計や就職について不安を感じるという意見が多かった。

(子どもが小さいうちは、母親が面倒を見るべきという考え方について)

- ・同感する、同感しない、どちらの意見が極端に多いという訳ではなかった。
- ・「同感する」理由については、「子どものことを考えると、そばにいてあげる方がよい」「一緒にいる方が、安心できるから」といった意見が多かった。
- ・「同感しない」理由としては、「子どもに社会性を身につけさせるべき」「自分自身も小さいときに保育園等に預けられたが、さみしいとは思わなかった」といった意見が多かった。

(「男性は仕事をし、女性は家庭を守るべき」という考え方)

- ・全体的に「同感しない」という意見が多い状況だった。
- ・「同感する」理由
 - 昔からそういうものだと思っていた。
 - 両立できる人は一部の人。母親がしんどいを見て、両立は大変だと思う。
 - 家事、育児を分担するのが思想ではあるが、現実的に難しいと思う。
- ・「同感しない」理由
 - お互いに家事・育児を分担することで、家庭もうまくいく。
 - 臨機応変にしていかないと、生活が成り立たない。
 - 両親は共働きで、すごく良い手本となっている。子どもへの教育にとってもよい。
 - 専業主婦では、世界が狭くなってしまう。

(10年後の自分はどうなっていると思うか)

- ・結婚して、子どもがいて、正社員で仕事を続けていると思う。ワイドショーで正社員とパート社員とで、生涯賃金がものすごく違うという話を聞いた。(女性)
- ・結婚して、子どもができて、正社員としてずっと働いていきたいが、実際はそうはならないと思う。(女性)
- ・定職についていればよいと思う。しかし、就職は非常に厳しい。(男性)
- ・親に頼らず自立したいので、フルタイムで働いていたい。(女性)
- ・母親がずっとフルタイムで働いていたので、働き方のイメージとしてはそのイメージしかない。(女性)
- ・結婚して、子どもがいる。子どもと一緒に時間をもちたいので、パートで働いていたい。(女性)

(その他の意見)

- ・知り合いで、エリートと結婚して、働かないという人もいるし、子どもがかawaiiそうだからという理由で、専業主婦志向の人もいる。経済状況の厳しさから、1、2年働いて辞める人もいる。(女性)
- ・将来への不安はあまりない。最悪、結婚したらよいという思いもある。(女性)
- ・母親がロールモデルと答えたが、とても私には真似できないと思う。母親の大変さをみていると、仕事を続けたいと思わない。
- ・女性の就職が難しい中、専業主婦として養ってもらえるならば、その方がよいと考える女性が増えているから、近年専業主婦志向が強まっているのではないか。

4. 若年者の男女共同参画に関する意識の現状（まとめ）

若年者調査等からわかった若年者の男女共同参画意識の現状について、以下に整理します。

20 歳代女性のロールモデルは「母親」が最多。ロールモデルの有無で男女共同参画意識に差。

- 20 歳代の女性にとってのロールモデルは「母親」が最も多くなっています。
- 20 歳代前半では、ロールモデルとして「母親」や「父親」の割合が高く、身近な家族の影響を受けていることがわかります。一方、20 歳代後半になると、「友人・同僚」や「学校・職場の先輩、上司」をロールモデルとする割合が高くなっており、年齢層でロールモデルに変化が見られます。
- ロールモデルがいる女性の方が、ロールモデルがいない女性に比べ、継続就労を選択し、固定的性別役割分担意識が低いなど、男女共同参画意識に差がみてとれます。

20 歳代の約 6 割が男女共同参画の学習経験あり。うち理解できた人が約 8 割。

- 20 歳代の約 6 割が男女共同参画の学習経験があり、そのうち理解できた人が約 8 割となっています。
- 男女共同参画の学習が、女性が継続就労を選択することにつながっていると考えられます。
- 男性についても、男女共同参画の学習が、配偶者の就労を選択することにつながっていると考えられます。
- 一方、「男は仕事をし、女は家庭を守るべき」「子どもが小さい時は、保育園などに子どもを預けず、母親が面倒をみるべきだ」という固定的性別役割分担に関する内容については、男女共同参画の学習経験があり、理解度が高い層の方が、同感する割合が高くなっています。男女共同参画を学ぶことで、現実の厳しさを認識し、現実を直視すればするほど、仕事と家庭の両立に向けた社会の未熟さや制度の未整備がわかり、両立は困難と考えたり、あえて厳しい道を選ばないという選択をしている若年者の傾向が現れているのではないかと考えられます。
- 男女共同参画の学習経験があり、理解度が高い方が父親の家事・育児参画に肯定的となっています。

「ゲーム」については、若年者の半数が「男性の登場人物が活躍するものが多い」と認識。

- 「テレビドラマ・映画」「まんが・アニメ」については、登場人物の認識に男女の違いはみられませんが、「ゲーム」については、若年者の半数が「男性の登場人物が活躍するものが多い」と認識しており、「ゲーム」の登場人物については男性中心の傾向があるのではないかと考えられます。

20 歳代の若年者の約 8 割が将来に不安。「生計」への不安が最多。

- 20 歳代の約 8 割が将来の生活に不安を抱えています。
- 不安の内容としては、「生計」が最も多くなっており、厳しい経済状況や就職難などを反映していると考えられます。
- また、「老後生活」が不安の内容の 2 番目となっており、年金や社会保障などの不安が反映されていると考えられます。
- 20 歳代の多くが「生計」について不安を抱えていることから、「自分だけの収入だけでは経済的に苦しいから」配偶者に仕事を継続してほしいと考える男性が多いと考えられます。
- 一方、将来の不安が少なければ、配偶者に仕事を継続してほしい理由として「好きな仕事をずっと続けてほしいから」「社会との関わりを持ち続けてほしいから」など経済的な理由以外の項目を挙げる割合が高くなっており、将来への不安の有無が、配偶者に就労を希望する理由に影響を及ぼしていると考えられます。

20 歳代女性の約 6 割が、働き方として育児等で仕事を一旦やめたり、家事に専念することを選択。

- 女性は、働き方の理想、現実とも、仕事を一旦やめる、または家事等に専念する割合が 6 割を超えています。また、一旦仕事をやめた後の働き方として、理想、現実ともにフルタイムよりもパートタイムを選ぶ割合が高くなっています。
- 男性についても、配偶者の働き方の理想、現実とも、仕事を一旦やめる、または家事等に専念する割合が 6 割程度となっています。また、配偶者が一旦仕事をやめた後の働き方として、理想、現実ともにフルタイムよりもパートタイムを選ぶ割合が高くなっています。
- 将来の生活の不安の多くが「生計」であり、男性は、自分だけの収入では経済的に苦しく、生計を補完するために、配偶者の就労を希望していることがわかります。

男女とも結婚や子どもを持つことへの希望は高いが、子育てに対するイメージに差あり。

- 20 歳代の男女とも、結婚や子どもを持つことに対する希望は高くなっています。
- 子どもの数は、理想より現実の方が少なくなる傾向があり、その理由としては、子育てのイメージから推察すると、経済的負担や時間的制約の影響が考えられます。
- 子育てのイメージでは、男性は女性に比べ、経済的負担感が高い一方、時間的制約や身体的・精神的負担の部分ではイメージが低くなっており、子育てへの関わり方の役割分担意識がイメージの差となっていると考えられます。

女性の約 3 割、男性の約 4 割が「男は仕事をし、女は家庭を守るべき」に同感。

- 女性の約 3 割、男性の約 4 割が「男は仕事をし、女は家庭を守るべき」に同感しています。
- 20 歳代の中では年齢が高い方が「男は仕事をし、女は家庭を守るべき」に同感する割合が高くなっており、社会での経験が固定的性別役割分担意識に影響していると考えられます。
- 「子どもが小さい時は、保育園などに子どもを預けず、母親が面倒をみるべきだ」については、女性の約 3 割、男性の約 2 割が同感しています。
- 「父親は、母親と役割分担して、家事・育児に積極的に参画すべきだ」に同感する割合は約 9 割となっています。同感する理由としては、「家事・育児は夫婦が協力して行うべきものだから」が最も多くなっています。

5. 若年者の男女共同参画意識に影響を及ぼす要因について

20歳代の男女共同参画意識に影響を及ぼす要因については、将来への生活に不安を抱く割合が約8割となっており、そのうち「生計」の不安が7割を超えているなど、近年の厳しい経済状況や就職難などの社会情勢による将来への不安の影響なども大きいと考えられます。

そうした影響があることを踏まえた上で、若年者調査の結果等からわかる要因について、以下に整理をします。

(1) 若年者の女性にとって『ロールモデル』が影響している

- ・ロールモデルのいる女性の方が、ロールモデルのいない女性に比べ継続就労を選択したり、固定的性別役割分担意識が低いなど、ロールモデルの有無が、20歳代女性の男女共同参画意識に影響を及ぼしていることがわかりました。
- ・ロールモデルがいることで、仕事と家庭の両立に向けたイメージがしやすくなり、より積極的に女性の継続就労や、男女共同での家事・育児分担などへの意識が高まるものと考えられます。
- ・一方、ロールモデルがいる女性は半数にとどまっており、ロールモデルがいない女性が多い実態も明らかとなりました。
- ・20歳代後半になるほど、「友人・同僚」や「学校・職場の先輩、上司」をロールモデルとする割合が高くなるなど、年齢層でロールモデルに変化があることがわかりました。

(2) 若年者の女性にとって『家族』とりわけ『母親』が影響している

- ・「母親」をロールモデルとする女性は、6割を超えており、特に20～22歳では76.8%となるなど、若年者の多くの女性は「母親」を「自分の将来像」としてとらえていることがわかりました。また、女性が「男は仕事をし、女は家庭を守るべき」に同感する理由として、「自分の家庭がそうだった」「自分の家庭はそうではなかった」をあわせて2割を超えており、固定的性別役割分担意識に対して、自分自身の家庭の状況が影響していることもわかりました。
- ・大学生へのヒアリング調査では、母親が仕事と子育てを両立していることを肯定的に捉える場合と、逆に両立の大変さを身近に感じ、両立は難しいと考えてしまう場合があることがわかりました。
- ・若年者の女性は、家族、とりわけ家庭内でよりコミュニケーションが密な母親の影響を大きく受けていると考えられます。

(3) 若年者にとって『教育』が影響している

- ・小・中・高等学校で男女共同参画を学んだことがある割合は6割を超えており、理解できた人は8割を超えています。
- ・男女共同参画の学習経験がある女性は、学習経験がない女性に比べ、継続就労を働き方の現実として選択する割合が高くなっています。また、学習経験がある男性は、学習経験がない男性に比べ、配偶者の就労を希望する割合が高くなっているなど、男女共同参画の学習経験が、若年者の就労希望に影響を及ぼしていることがわかりました。
- ・「男は仕事をし、女は家庭を守るべき」「子どもが小さい時は、保育園などに子どもを預けず、母親が面倒をみるべきだ」という固定的性別役割分担に関する内容については、男女共同参画の学習経験があり、理解度が高い層の方が、同感する割合が高くなっています。
- ・一方、「父親は、母親と役割分担して、家事・育児に積極的に参画すべきだ」については、男女共同参画の学習経験があり、理解度が高い方が、同感する割合が高くなっており、男女共同参画教育が若年者の意識に様々な影響を与えていることもわかりました。

6. 今後の方向性と対応方策

若年者が性別による固定的な役割分担意識にとらわれず、多様な選択ができる社会に向け取組を進めていく必要があります。そのことが、若年者の将来への不安の解消にもつながります。そこで、若年者の男女共同参画意識に影響を及ぼしている要因を踏まえた上で、今後必要な施策の方向性と対応方策を以下に整理します。

1

ロールモデルを見つけることができる！

●身近で多様なロールモデルの提示・交流機会の提供

- ・ロールモデルがある若年者の女性は5割にとどまっており、また、大学生へのヒアリングでは、ロールモデルがないという声が多く聞かれました。また、若年者の女性では、普段接している母親をロールモデルとする傾向があることがわかりました。
- ・これは、若年者が社会の中でロールモデルに接する機会が少ないからだと考えられます。
- ・そのため、女性が自らのキャリアをイメージしながら、自分自身のロールモデルを見つけ出すことができるようにするためには、様々な機会を捉え、身近で多様なロールモデルを提示していくことが求められます。
- ・そこで、県内のロールモデルに関する情報を収集し、ホームページで紹介したり、若年者の社会人や学生とロールモデルとの交流の機会を設けるなど、ロールモデルがイメージしやすくなるような取組が必要です。
- ・ロールモデルの提示とあわせ、経営戦略として女性の活用を積極的に進めている企業の取組などについても発信することが必要です。
- ・県内だけにとどまらず、国や他の都道府県と連携しながらロールモデルの共有化を図ることで、より多様なロールモデルの提示が可能となると考えます。

2

母親や父親がいきいきと仕事と子育てを両立できる！

●母親が仕事と子育てを両立できる施策の推進

- ・若年者の女性は母親をロールモデルとしてとらえることが多い一方、両立の大変さを身近に感じてしまうこともあることがわかりました。
- ・若年者にとってのロールモデルである母親が、いきいきと「仕事においても、家庭においても」その能力を十分発揮できる環境づくりが必要です。
- ・本審議会では、平成23年3月に「仕事と子育て両立支援策提言書」を取りまとめたところであり、女性の継続就労を阻む原因を探るとともに、仕事と子育ての両立に向けた具体的な方策を提言しています。
- ・「滋賀マザーズジョブステーション」による取組など、すでに施策化されている提言もありますが、今後は、提言の内容の具体化に向けた取組をより一層進めることが求められます。

●父親の家庭力発揮への支援

- ・母親の両立支援においては、父親の家庭内における役割を再構築していくことが必要だと考えます。父親が長時間労働により、家事や育児に参画できない状況では、母親の家事育児負担が増え、母親の継続就労が困難となります。父親が仕事だけでなく、家庭においてもしっかりと役割を果たせるよう、父親の「家庭力」の発揮に向け、意識改革や職場環境の改善などに取り組む必要があります。
- ・また、家事や育児を積極的に実践している男性を応援するなど、男性の仕事と生活の調和の広がりや周囲の理解・協力促進につながるような普及啓発の取組も必要です。

3

充実した男女共同参画教育を受けることができる！

●発達段階に応じた男女共同参画教育の推進

- ・男女共同参画の学習経験がある方が、女性の継続就労を選択する傾向にあるなど、男女共同参画教育の成果があらわれています。
- ・一方、男女共同参画を学習することで、現実の厳しさも認識し、仕事と家庭の両立を選択しないという傾向もあり、教育の難しさも見てとれます。
- ・今後は、現在の副読本による活用をより一層進め、活用率を向上させていく必要があります。
- ・また、小学校の低学年から高校まで様々な機会を捉えて、発達段階に応じた教育を推進していくことが必要です。
- ・ロールモデルの重要性も確かめられたところであり、男女共同参画教育において、具体的なロールモデルの紹介、ロールモデルとの交流などを進めていくことも大切です。
- ・学校教育だけにとどまらず、家庭や地域など、様々な場面で男女共同参画意識の醸成を図っていく必要があります。

●大学等における男女共同参画教育の推進

- ・将来への生活に対して多くの若年者が不安を抱えており、将来のキャリアビジョンを描くことが難しくなっています。
- ・そこで、大学等においては、将来設計を具体的に盛り込んだキャリア教育と連携しながら男女共同参画教育を進めていくことが効果的です。
- ・また、「男女共同参画」をキーワードに、キャリア、ロールモデル、社会保障など、複合的な教育を展開していく必要があります。

7. 若年者の男女共同参画の推進に向けて

今回の検討では、20歳代女性の固定的性別役割分担意識の変化をきっかけとして、20歳代、および大学生の男女共同参画意識やその背景にある要因などについて議論を進めてきました。人口減少社会にあって、若年者が将来に希望をもつことができ、自らが望む生き方、働き方を安心して選択できる社会が必要であり、今回の検討結果では、そうした社会に向け、若年者を取り巻く様々な課題が明らかとなりました。

若者の男女共同参画意識に影響を及ぼす要因として、「ロールモデル」「家族とりわけ母親」「教育」の3つをあげ、課題解決に向け、今後の方向性を示しました。若年者を取り巻く環境はめまぐるしく変化しており、若年者の意識の要因は様々だと思われませんが、今回検討した3つの要因が、若年者の男女共同参画意識に大きな影響を及ぼしていることは間違いないと考えます。

将来に不安を感じる若年者が多い中、若年者の将来への不安を払拭し、前向きに「働くこと」「生活すること」に向き合ってもらえるよう、安心して多様な生き方が選択できる社会でなければなりません。そのため、一人ひとりが将来のキャリアビジョンを描き、誰もが自分自身のライフスタイルに沿った働き方ができる、一旦仕事をやめても再チャレンジができるなど、柔軟な就労環境の整備も必要です。

滋賀県男女共同参画計画～新パートナーしがプラン～においては、重点目標として「男女共同参画意識の浸透と自立意識の確立」を掲げており、今後は、若年者が固定的性別役割分担意識にとらわれず、男性も女性も多様な選択ができ、一人ひとりが自立する力をもっていきいきと生活できる社会に向け、より一層の取組に期待するものです。

8. 参考資料

若年者の男女共同参画に関する意識調査 調査概要

1. 調査目的

滋賀県の若年者（20歳～29歳）の男女共同参画に関する意識と実態を把握し、今後の男女共同参画社会の実現に向けた施策に役立てるための基礎資料とします。

2. 調査の概要

- (1) 調査地域 県内全域（全市町から対象者抽出）
- (2) 調査対象 県内在住の20歳代の男女2,000人
- (3) 抽出方法 選挙人名簿を元に層化二段無作為抽出法
- (4) 調査方法 質問紙による郵送調査
- (5) 調査期間 平成23年10月5日～10月26日
- (6) 有効回収率 28.0%（560人）

3. 調査項目

調査項目（全6項目）	主な調査内容（副問を除く全29問）
(1) 回答者の属性	<ul style="list-style-type: none">・性別・居住地・家族構成・職業・年齢・既婚・未婚・滋賀県での居住経験
(2) 仕事	<ul style="list-style-type: none">・仕事をしていない理由・就労に対する意向・仕事をする目的・仕事、家庭生活、地域・個人の生活の優先度・女性の働き方についての意向
(3) 結婚・子育て	<ul style="list-style-type: none">・結婚後の男女の役割分担についての考え方・結婚、子どもについての考え方・子育てについてのイメージ
(4) 取り巻く環境	<ul style="list-style-type: none">・将来の不安・男女共同参画の学習状況・メディア等への印象
(5) デートDV	<ul style="list-style-type: none">・デートDVの経験・デートDVに際しての相談相手
(6) 男女共同参画社会	<ul style="list-style-type: none">・仕事と家庭での男女の役割分担についての考え方・子育てでの女性の役割についての考え方・家事・育児での父親・母親の役割分担についての考え方・男女共同参画社会の浸透度

4. 標本構成

(1) 層化

県内の市町を次のように層化しました。

地 域 名	市 町 名
大 津	大津市
湖 南	草津市、守山市、栗東市、野洲市
甲 賀	湖南市、甲賀市
東 近 江	近江八幡市、東近江市、日野町、竜王町
湖 東	彦根市、愛荘町、豊郷町、甲良町、多賀町
湖 北	長浜市、米原市
湖 西	高島市

(2) 標本数の配分

各地域の規模の層における20歳代の人口構成比を基に、2,000人の標本数を比例配分しました。その際、各地域とも統計的な信頼度が確保できるように、以下のとおりの抽出ウエイトを設定しました。地域別の抽出数が異なるため、回収数に集計ウエイトを加重し、補正しました。調査結果では、この「規正標本数」を基数として集計を行いました。

地 域	20歳～29歳人口	抽 出 ウエイト	標本数	有効 回収数	集 計 ウエイト	規正 標本数
大 津	36,221	1 / 2	439	120	2	240
湖 南	36,288	1 / 2	442	135	2	270
甲 賀	17,691	1 / 2	215	59	2	118
東近江	27,241	1 / 2	332	90	2	180
湖 東	17,968	1 / 2	218	63	2	126
湖 北	17,922	1 / 2	218	57	2	114
湖 西	5,591	1	136	36	1	36
合 計	158,922	—	2,000	560	—	1,084

5. 調査票の回収結果

有効回収数は28.0%（560件）となり、それぞれの地域の回収率は以下のとおりでした。

地域	標本数	有効回収数	有効回収率
大 津	439	120	27.3%
湖 南	442	135	30.5%
甲 賀	215	59	27.4%
東近江	332	90	27.1%
湖 東	218	63	28.9%
湖 北	218	57	26.1%
湖 西	136	36	26.5%
合 計	2,000	560	28.0%